

和 合 図 像 考

古 勝 正 義

北九州大学外国語学部紀要

第 76 号

抜 刷

1992年 12 月

和合図像考

古 勝 正 義

1 はじめに

和合は中国の民間信仰の神である。ふつう「和合二仙」「和合二聖」とも呼ばれるほか、「和合仙」「和合神」「和合二神」「和合二神仙」「和合二仙人」など、たくさんの別名をもっている。

図像のうえでも変化に富んでいる。天真爛漫な唐子髻の童子がなにかの遊びをしているらしい図があるかとおもえば、禿頭、ザンバラ髪の老人が笑顔をつくって立っている図があり、胸をはだけた裸足の男を描いた図があるかとおもえば、身なりを整えた謹厳な雰囲気の図像もある。ちょっと見たところでは、同一神格とは思えないほどの変身ぶりである。ただ、こうした多様な変化にもかかわらず、この神はまたたいへんはっきりした図像的特徴をもつ神でもある。つねに二神である点、持物として円盒（まるいこぼこ）と蓮または如意をもっている点、ほとんどの場合、笑顔を浮かべている点、などがそのおもなものである。

この神は名前のとおり和をつかさどるが、同時に財をもたらす神でもある。和の神にして財の神でもあるとはどういうことか。和をつかさどる職能と財をつかさどる職能がこの神においてどう統一されているか。「和をもって貴しと為す」と信じる中国人のつくりだした神としてみた場合、こ

れは考えてみる値打ちのある問題であるにちがいない。

ところで、こうした職能や図像的な多様さは、当然その素姓・来歴に由来するところが大きいと考えられるが、じつはこれがまだよくわかっていない。この神はどのような原型から出てき、どのような成長史を経てきているのか、探究がなされていないわけではないが、所説はまちまちである。管見に入ったなかから、おもな説をあげる。

(一) 『辞海』(1947年版)「和合」の項に説明があり、関連する部分は次のとおりである——

①神名。…(略)…『西湖遊覧志』に、宋代、杭城〔杭州〕で万回哥哥を祀り、和合の神といていたとあり、今俗に描く図像はこれに拠っている。ただし、昔は一神であったが今は二神である。けだし、和諧和合の意を取って二神の像に描くものであろう。…(略)…

②清の雍正11年に寒山を和聖に、拾得を合聖に封じた。「和合二聖」とも称する。

(二) 瀧川政次郎「天櫃和合神考」(『吉原の四季』1971年)——

和合神として祭られているものは、最初は萬廻ひとりであったのが、後に寒山・拾得のふたりになったようである。そう変遷していった時期は明らかでないが、元・明の頃であるとみてよいと思う。

(三) 宗力・劉群『中国民間諸神』(1986年)「万回(和合)」の項の末尾に、編者による次のような説明がある——

『西湖遊覧志』には、宋代の杭州では臘日〔正しくは「臘月」(陰暦十二月)

——引用者〕に万回哥哥を祀ったが、その像は蓬頭笑面で、和合の神といていた、とある。清人は、和合は二神であるべきで万回一人をこれに当てるのは妥当ではないと考えた。そのために、雍正11年にべつに唐代の詩僧寒山・拾得を和合二聖に封じた。これ以後一神が二神になった。しかし、民間で描かれる和合二仙像はみな蓬頭笑面で、依然として万回伝説に拠っている。一人が荷花〔蓮〕をもち一人が円盒を捧げるのは同音を利用したものである〔荷と「和」、盒と「合」が同音で、あわせて「和合」を表わすということ——引用者〕。

(四) 服部幸雄「和合神の図像」(『さかさまの幽霊』1989年)——

「和合二聖」が蓬頭緑衣の非人乞食のような姿に転じた…(略)…この姿が、いつの時代か寒山拾得の像に付会習合されていくのは必然であろう。一方、…(略)…清代において寒山を和聖、拾得を合聖、二人合わせて「和合二聖」と称することが行われていた。「二聖」の図像が混淆し習合したのは当然であった。蓬頭緑衣にして、かつ財宝神でもある和合神像の成立である。

中国の和合信仰はその図像とともに江戸時代の日本に伝えられ、文化年間に江戸で「和合神」として大流行したことがある。瀧川、服部両氏の研究は、いずれも江戸の「和合神」への関心を出発点としてなされている。同じような関心から和合の考証に先鞭をつけたのは幸田露伴(『和合人合神』1938年)である。

さて、和合の原型または前身として万回(万廻)と寒山拾得が問題になることは、これらの諸説にも見られるとおりである。ところが、和合と万回、寒山拾得がどのような関係にあるかという点になると、うえの引用に

示されている見解は四者四様である。

『辞海』は、神としての和合は宋代に祀られていた万回が二神に変わったもので、「和合二聖」寒山拾得はこれとべつものとみなしている。これに対して瀧川氏は、和合を寒山拾得とべつものとはみなさず、万回の流れを汲む和合の神が元・明のころ寒山拾得の二神に変わったとする。この見方からすると、後世の和合は万回と寒山拾得というふたとおりの原型から成り立っているということになる。万回の流れを汲む一神の和合が寒山拾得の二神に変わったとする点では同じだが、変化の時期を清・雍正11年以降に引き下げて考えるのが宗力・劉群『中国民間諸神』である。一方、服部氏は、露伴の見方を容れて、万回を和合神の前身とは認めない。ふたとおりの「和合二聖」を考え、その混淆・習合の結果が和合神であるとする。第一の「和合二聖」として想定されているのは、文脈からすると、永尾龍造『支那民俗誌』第二巻所掲の「和合財神像図」（図像中の神名は「和合二聖」）や瀧川氏の論文に掲載されている「和合二聖」のような、「正装」した二神がそれぞれ円盒と如意をもった姿を描いた図像のようである。これが「蓬頭緑衣の非人乞食のような姿」に変わり、第二の「和合二聖」すなわち雍正11年に「和聖」「合聖」に封ぜられたあとの寒山拾得と混淆・習合したというわけである。

いずれにしても、和合が寒山拾得の影響をうけて変貌をとげたことはまちがいない。それでは、寒山拾得の影響は和合の図像的特徴や神としての職能・性格などの面にどのような形で現われているのだろうか。本稿では、まず時代を明清にしぼり、明清間における和合の変容、とくにこれと寒山拾得との関わりを明らかにしておきたいと思う。そのうえで、さらに、和の神にして財の神であるとはどういうことかという、はじめにあげた問題について、その持物から考えることにする。

2 清代の蘇州系の和合

さきに清代の和合像からみることにする。

もともと和合は江蘇・浙江の都市で信仰された神である。なかでも、無帽のふたりの男が蓮と円盒をもった姿を描く清代の典型的な和合像は、江南最大の商業都市蘇州と深く結びついている。したがって、清代の和合像をみるとしたら、当然ながらまず蘇州系の和合をみなければならない。

清代の和合像は、大判の画軸や木版年画、刺繍・緯絲、風俗画報、戯曲小説、俗曲、造形物、建築装飾、器物装飾、文人の著作などに資料を求めることができるが、ここでは年代の明らかなもの、および高い確度で年代推定の可能なものを資料とする。おもなものは次のとおりである。

(一) 婚礼時に祀る和合像——新婦の到着後ただちに行われる「拜堂」の儀式において、新郎新婦は、庁堂正面に掛けた大判の和合像を天地諸神とともに拝む。これについては、光緒年間に上海で発行されていた絵入り新聞「点石齋画報」中の婚礼図が利用できる。十数点にのぼる婚礼図によって、当時の江南の婚礼風俗の実際を知ることができるばかりでなく、正面に掛けられた和合像についても比較的丹念な描写がなされているので、これによって当時の和合の図像的な特徴を知ることができる（なお、「点石齋画報」のいくつかの図から、和合像は花嫁の乗る「花轎」^{かざりかこ}の装飾にも用いられたことがわかる。「点石齋画報」の絵を描いたのは蘇州出身の有名な画家吳友如やその周囲の画家たちで、図中の和合像は蘇州系のものである。

(二) 木版年画——和合は独立の図像、財神の属神、群像の一部などとして木版年画に現われる。清末では蘇州桃花塢の王榮興の作品に数点の和合像が残っている（『蘇州伝統版画台湾収蔵展』1987年、などで見ることができる）。乾隆・嘉慶年間では、唐船で長崎に運ばれた蘇州年画が日本国内に残って

おり、和合像が見られる。そのなかでは、「和合二聖」図（王舎城美術宝物館蔵。『蘇州版画』1992年、所載）が時代的に最も新しい作品で、乾隆末期または嘉慶年間のものと考えられる。服部幸雄氏の発見によれば、日本の文化年間に江戸で「和合神」信仰が大流行したころ、式亭三馬の合巻「わごうじんゆかりのいとすじ和合神所縁赤縄」（文化11年刊）に歌川美丸が描いた「夫婦和合神、一名吉兆神尊像」は、この「和合二聖」図に酷似している。服部氏は「この種の版画図は、版本となって流布していた三馬本の歌川美丸画を粉本として制作されたのではないかと考えられるが、逆の可能性も否定しきれない」といっている。しかし、これは式亭三馬が中国の「和合二聖」図を自分の作品の趣向に利用したものであって、三馬の本にまねて「和合二聖」図が制作されたということはあるまい。というのは、図中のカササギだけをとってみても、これは中国の和合像によくみられる取り合わせであって（後述）、日本人の着想を模倣した可能性は考えられないからである。式亭三馬がカササギをセキレイとみなして、いざなぎ・いざなみの「みとのまごはひ」にこじつけているのは、もちろん戯作者一流の冗談であるが、江戸でカササギを目にすることはまずなかったはずだから、三馬がこれをセキレイとまちがえたのはやむをえないことでもあった。

江戸で和合神が流行するなか、中国の和合像の模写や模刻が行われた。服部氏があげている「夫婦和合吉兆神像」（矢追博美氏蔵）や「子孫繁栄子宝神像」（吉田暎二『浮世絵事典』所掲）などがそれである。日本製ではあるが、中国の和合の主要な図像的特徴は忠実に伝えていると思われる。

時代を溯ると、乾隆31年＝1766年と同37年＝1772年の暦画が残っており（黒田源次『支那古版画図録』1932年、所録）、これに和合が描かれている。図柄は同一である。年記のある清代の和合のうちでは、この乾隆31年の暦画が最も早い。

乾隆初期の作品に大判の「聚宝盆」図があり（樋口弘『中国版画集成』

1967年、所録）、なかに和合が描かれている。管見に入ったなかでは、清代の和合の最も早い時期のものである。

（三）文人の著作——嘉慶3年＝1798年の序のある顧張思『土風録』、乾隆16年＝1751年の序のある翟灏『通俗編』などに短い記述がある。蔣士銓の「和合を画く」詩（乾隆35年＝1770年作）からも図像の大略を知ることができる。

和合の仲間

和合は他の神の属神になっていたり、群像の一部として表現されたりもする。この神がどのような主神のもとに配されているか、どのような神々と仲間をつくっているかを知ることが、その職能および性格を明らかにするたすけになるばかりでなく、素姓・来歴をさぐる手がかりともなる。

財神の属神として描かれているものに、王栄興の「和合財神」図や「賜福財神」図がある。「和合財神」図では財神の前方、左右にわかれて、蓮と円盒をもった和合が侍立している。「賜福財神」図では、聚宝盆を前にした天官の左右に、和合と招財・利市が侍立している。乾隆31年および同37年の暦画では、関羽（武財神）、虎をつれた趙玄壇、天官および利市と思われる神とともに描かれる。和合自体はふつう財神とは呼ばれないが、これらの図像にみられる取り合わせは、その職能として財をもたらし力が考えられていることを示すものである。

仙界にあっては、劉海蟾、八仙、張仙などとの関係が深い。とくに劉海蟾は、和合二仙という双子の兄弟のもうひとりの兄弟とでもいえるほど密接な関係にあり、劉海蟾が和合二仙の片方にとってかわる場合もめずらしくない。

王栄興の年画「五子奪魁」図では、和合は子授けの張仙と並んで、栄達と致富のモチーフを演ずる子供たちを見守っている。

これらの仙人とつれだって八仙が登場するのは、おもに祝寿の場面である。刺繍や俗曲で群仙祝寿の場面を表現するときには、西王母、福・禄・寿三星、八仙、東方朔、麻姑、劉海蟾、和合二仙、張仙などが勢ぞろいする。例をあげると、嘉慶年間に刊行された李汝珍の小説『鏡花縁』第1回、百花仙子が西王母の誕生祝「蟠桃会」に赴く途中、やはり蟠桃会に出かける仙人の一团に出会うが、その顔ぶれは、福・禄・寿・財・喜の五星、木公、太上老君、彭祖、張仙、月老、劉海蟾、和合二仙などである。嘉慶9年=1804年編集の俗曲集『白雪遺音』所収の南詞「慶寿」には、八仙、福・禄・寿三星、和合二聖、劉海（劉海蟾）、魯班仙、張仙、麻姑仙（麻姑）、陳搏、王母（西王母）が詠みこんである。このような場面への出現から、和合には祝福神としての性格があることがわかる。和合の祝福神としての性格は、その和と財の職能にも劣らず重要な一面と思われる。

和合の風貌

清代の和合はきわめて特徴のある風貌をしている。風貌の特徴は、顔貌・頭髮・着衣・足部のいずれにもあらわれる。

蘇州系の和合は例外なく笑顔をつくっている。ただ老人形か青年形か童子形かのちがいが、あるいは肥満型か痩型かのちがいがによって表情に変化が生じ、笑顔にもおのずと個性が現われる。老人形、青年形を問わず目尻と鼻唇溝の深いしわを強調する傾向がある。

蘇州系の和合は無帽を特徴とする。これにもまず例外はない。露出した頭部はザンバラ髪か、いわゆる唐子髻かである。ザンバラ髪の場合はいくらか変化に富み、髪全体をのばした形、額から禿げあがった残りの髪をザンバラにした形、カッパのように頭頂をまるく剃った形などの類型にわかれる。

着衣は一般に道衣を着用する。道衣は襟元を整えてあることもあるが、

胸をはだけ腹部を露わしているときに、和合のもっともめだつ特徴の一つになる。足は鞋をはいている場合と裸足の場合がある。裸足は胸をはだけるのと同じ意味あいを持ち、やはりめだつ特徴となる。

二神の風貌はたがいに似せて描くのが普通である。髪型や着衣の色彩は確かに異なっているばあいもあるが、一對のよく似た風貌を並べるのが通例である。

また、年齢についていえば、老人形・青年形・童子形があるが、童子形は時代がくだる。全体的な趨勢として時代がくだるとともに童子形が優勢になるようである。

持物と姿態

清代の和合の最も重要なめじるしは二神の一方が抱える円盒である。円盒はときには聚宝盆にとってかわられていることもあるが、和合の基本的な持物は円盒である。この円盒に加えて、蓮と如意のいずれか、またその両方をもつ。清末の王栄興の年画や婚礼の画軸に描かれる和合は、例外なしにひとりが円盒を抱き、ひとりが蓮をもっている。乾隆末または嘉慶年間の作と考えられる木版画「和合二聖」図や乾隆31年及び37年の暦画、乾隆初期の大判の年画「聚宝盆」図なども同様である。ただ、日本で模作された「夫婦和合吉兆神像」や「子孫繁栄子宝神像」に見られるように、円盒を抱えた方がもう一方の手に如意をもち、もうひとりが蓮をもつ図像もなかったわけではない。

最後に姿態から蘇州系の和合をみると、並んで立つ姿、並んで歩く姿、地面に尻をつき体を寄せて坐る姿、ひとりが立ちひとりが坐る姿、などになっている。多くの場合、肩を組むか、ひとりが相棒の肩に手をかけるかし、あるいは足をはねあげて跳る仕草をする。親昵の情または歓喜の気分が濃厚である。中国人の思い描く和のありかたが理想化されて表現されて

いるのであろう。

風貌・姿態・持物におけるこのような図像的特徴の由来ないし原型はどこに求められるか。蘇州系の和合が寒山拾得と深い関係にあることは疑問の余地がない。和合の素姓について考えを述べている清朝人も例外なく寒山拾得とのつながりを指摘している。翟灏は、宋代の杭州で「和合の神」万回が祀られていたことを述べたあと、「いま、和合は二神を並べて祀る。ところが万回は一人だけだから、これに当てることはできない。国朝〔清〕雍正11年に天台の寒山大士を和聖に、拾得大士を合聖に封じた」といっている（『通俗編』）。「和合を画く」という詩を詠んだ蔣士銓が図像のモデルとしたのは寒山拾得である。顧張思も『土風録』で、「和合は宋の高僧寒山拾得である」と明言している。さらに幕末に長崎に来ていた朱柳橋という人も、「吾邦和合像を絵にせる者あり、世に伝ふ即ち寒山拾得なり」と言っている（幸田露伴「和合人和合神」所引日尾判山『燕居雜話』）。江南にかぎれば、清代には和合は寒山拾得だと信じ、寒山拾得の図像にもとづいて和合像を作成するのが主流だったのである。

うえにあげた持物をべつにすれば、和合の図像的特徴が寒山拾得の形象を下敷にしていることは多言を要しないであろう。ザンバラ髪または唐子髻、含みのある複雑な笑顔、往々にして胸をはだけたり裸足になったりする型やぶりの扮装などはまさに寒山拾得のものである。

一見してわかる風貌や表情の共通性のほかに、寒山拾得伝説が巧みに和合の図像に表現されている場合もある。たとえば、乾隆末期または嘉慶年間の木版画としてこれまでもふれた「和合二聖」図は、ふたりが肩を並べて山坂をのぼるところを描いている。山坂をのぼりつめた先には崖が立ちふさがっている。つまり、ふたりはこの崖にむかって急いでいるのである。この構図は、顧張思が、『伝燈録』に、閻邱大夫が豊干のことばにし

たがってふたりを訪ねたところ、手に手を取って石岩にむかっていき、姿をかくした、とある。後の人はその像を描いて和合と名づけている」と述べているとおり、森鷗外の小説によってわれわれにもなじみの深いあの寒山拾得伝説にもとづいているのである。蔣士銓の「和合を画く」詩も、

石巖滅影 誰か之を見ん

偷み来って写し作す和合の姿

と詠んでいる。

二神が似た容貌に描かれている点なども、寒山拾得と関係がある。寒山拾得は二身にして一身という関係にあり、明代の雜劇「魚籃記」では、普賢・文殊が寒山・拾得という兄弟に化身して俗界に現われる設定になっている。長崎に来ていた朱柳橋のことばに、「蓋し寒山拾得は道行高深、同じく一寺に居り、共に投契たり、面目相似たり、故に称して和合と為す」とある。幸田露伴はこのくだりをとりあげて、「朱柳橋は賈舶に搭乗して長崎に来れる清人のみ。二聖面目相似たり、故に称して和合と為すといへるが如きは、糊塗一時の言、取るに足らず」と決めつけているが、「面目相似」という点が和合像の条件の一つと考えられていたことは否定できない。

清代の和合を代表するのは、以上のような特徴をもった蘇州系の和合であるが、しかし、この類型に入らない和合図も、もちろん多い。たとえば、北方や浙江省余杭には、頭巾をかぶり円盒と如意をもった比較的謹厳な雰囲気^{（ママ）}の和合像がある（王樹村編『中国民間年画史図録』上巻、1990年、など）。これは「和合二聖」という名こそついているものの寒山拾得との図像上のつながりが認められず、蘇州系の和合とは懸隔が大きい。このちがいは、寒山拾得との習合を経たか否かによるもので、頭巾をかぶり円盒と如意をもつという図像上の特徴は、じつは明代の和合のものでもある。

3 明代の和合と寒山拾得

明代の和合については、ごくわずかな資料が利用できるだけである。ここで用いるのは、崇禎4年＝1631年に刊行された余象斗の小説『華光天王南遊志伝』、万暦年間の小説『三遂平妖伝』20回本、戯曲「長生記」、嘉清年間の田汝成『西湖遊覧志余』などである。

こうしたわずかな資料によって知られることがらは当然ながら限られたものでしかない。したがって一斑をもって全体を推しはかるほかない。

明代の資料では、和合は、この名前のほかに「和合二仙」「和合二神」「和合二神仙」「和合神」などと呼ばれる。「和合二聖」という名称は明代の資料には見当たらない。この点は、清代の蘇州系和合の出現の時期を探る手がかりの一つとなるにちがいない。

『華光天王南遊志伝』にはこの神が哪吒の配下として華光天王と戦う話がある。その場面の挿絵にふたりが並んだ図像がある。ふたりとも長袖、丸首の長衣(円領衫)を着用し、頭に頭巾をかぶり、足には鞋をはいている。左側の人物は如意をもち、右側の人物は円盒を抱えている。小説の地の文章によれば、ふたりの持物は「如意花」と「宝珠果盒」と書かれている。挿絵でふたりをよく似た容貌に描いてあるのは、兄弟同士という小説の設定に対応している。ふたりとも生真面目な表情で、笑顔ではない。

和合の仲間をみると、まず招財と利市がこれと関係の深い神としてあげられる。明代に刊行された話本小説には、和合と利市が並祀されたことを示す記述の見られるものがあるが、話本は時代の特長がむずかしく、宋元明いずれかの時代の習俗を反映したものとしきれない。いくら時代を限定しうるのは万暦年間の刊本のある『三遂平妖伝』20回本である。その第9回に、聖姑姑の子左黠が乞食法師の姿で、町の小商人のところへやっ

てきて文句を唱えるくだりがある。その文句は、

「招財さんいらっしゃい、利市さんいらっしゃい、和合さんいらっしゃい、銭もっていらっしゃい」

というものである。これによって、明代には、招財、利市、和合が関係の深い神であり、しかもいずれも財をもたらす神として信仰されていたことが推定される。さきに清代の和合をみたときに、招財、利市、和合が財神の横に侍立する図像のあることにふれたが、三者の密接な関係はおそくとも明代後期にはすでに始まっていたのである。

明代の戯曲「長生記」の中の「八仙慶寿」の曲が清初に蘇州で刊行された『千家合錦』に残されている。この曲では、祝寿の群仙として、漢鐘離・呂洞賓などの八仙、東方朔、寒山拾得、陳搏、畢吏部(畢卓)、呉道士、和合二神仙、劉海(劉海蟾)、杜康、李白などをかぞえている。劉海蟾や八仙とともに祝福神とし登場しているのが注目される。

もうひとつ、このリストで重要なのは、和合のほかに寒山拾得をあげている点である。このリストでは、和合と寒山拾得とを別々の神とみなしているわけである。これは、『華光天王南遊志伝』の図像が寒山拾得の図像とあまり共通点をもたないという事実などと合わせて、明代においては和合と寒山拾得とはまだ別々の神格だったと考えるべき根拠となりうるものである。

以上をまとめれば、明代の和合と清代の蘇州系の和合とは、持物・職能・性格において共通性を持ち、また形貌の似た二神という点でも共通性があるが、風貌・扮装の面では相違がはなはだしいといえる。

清代の蘇州系の和合の風貌・扮装は寒山拾得のものである。それでは、寒山拾得が和合に接近しこれと習合するにいたった背景になにがあったか。どのような要因が寒山拾得と和合を結びつけたのか。

第一に、両者がともにたがいに形貌のよく似た一对の「兄弟神」であっ

たという共通性があげられる。

第二に、祝福神としての共通性である。「長生記」中の「八仙慶寿」の曲にみられるように、明代の和合二仙と寒山拾得とはともに祝寿の場面に姿を現わす。寒山拾得についていえば、劉海蟾や八仙とともに祝寿の群仙の仲間に入っている。群仙慶寿図の流れを溯っていけば、清代の八仙、劉海蟾、和合…などの顔ぶれから、明代の八仙、劉海蟾、寒山拾得…といった顔ぶれにたどりつくことができるのである。その例は、明代後期の作とみられる緋絲「群仙寿字堂幅」(鎮江市博物館蔵。高漢玉編『中国歴代織染繡図録』1986年、所録)にみられる。肉太の大きな「寿」字の形の中に、鳳凰にのった西王母、鹿をつれた寿星、漢鐘離・呂洞賓などの八仙、寒山・拾得、海波の上の蟾蜍と戯れる劉海蟾などの姿がみられる。寒山拾得は、禿げ残った後髪をザンバラにした肥満型の男がふたり体を寄せて地面に坐った姿に描かれている。手前の方の男が抱えているのは、鉢の形をした大きめの容器である。

和合と寒山拾得を結びつけた第三の媒介要因として考えられるのは、この鉢と円盒との形態上・機能上の類似である。寒山拾得の代表的な持物は寒山の経巻、拾得のホウキであるが、清朝人は、寒山拾得の瓦鉢を和合の抱える容器の原型と考えていた。顧張思は、寒山拾得が手に瓦鉢をもっているのは、閩邱胤が訪ねたときに、ふたりはちょうど厨で火にむかって粥を食していたからで、この瓦鉢が誤り伝えられて「聚宝盆」になったのだと述べている(『土風録』)。蔣士銓の「和合を画く」詩も、

瓦鉢^{いか}争で疑わん聚宝盆

葫蘆売る可し 交歛菓

と、寒山拾得の瓦鉢が聚宝盆として新しい意義をあたえられたことを詠んでいる。顧張思も蔣士銓も聚宝盆のことを言っているが、和合の持物としては円盒も含めて考えてよいであろう。「群仙寿字堂幅」に見えるような

寒山拾得がまさに顧張思や蔣士銓の考えていた和合の原型にちがいない。そして、この鉢は円盒との形態上・機能上の類似によって、寒山拾得と和合という別々の神を習合させるのに寄与したと思われる。

4 明清間の変容

以上見てきたところに若干の補足を加えながら、明清間における和合象の変容を整理しておこう。

明代後期には二神の和合が存在して、「和合二神」「和合二仙」「和合二神仙」などとも呼ばれていた。この和合はふたりとも頭巾に円領衫、鞋という扮装で、ひとりが円盒を、ひとりが如意をもっていた。一方、寒山拾得はザンバラ髪、むきだしの胸や腹、裸足など、特徴のある風貌で、ときにホウキと経巻のかわりに鉢を抱えた姿でも描かれた。

この両者は清代に入って習合し、風貌・姿態の面では寒山拾得の特徴をそなえ、職能・持物などは前代の和合を継承した新しい和合が現われた。それが蘇州系の和合である。その最も早い時期のものとして確認できるのは乾隆初期のもので、それ以前には見当たらない。蘇州系の和合像は、雍正11年に寒山と拾得がそれぞれ「和聖」「合聖」に封ぜられたのちに出現した可能性が大きい。「和合二聖」という呼び名も、それ以前には見られない。

江戸で流行した蘇州系の和合の図像について、その原本は明の香谷道人が伝えたものかどうか、元禄年間(中国では康熙年間)に長崎に伝えられたものかどうかもいわれているが、現在のところは疑問とせざるをえない。

蘇州系の和合のほか、北方や浙江省余杭などに、明代の和合と酷似した和合像がみられる。これは図像のうえで寒山拾得の影響をうけることなく、前代の和合の特徴を保持したものと考えられる。

5 円盒と職能

「和」の観念は、大は文化の根幹をなす世界観から小は俗人の処世術にいたるまで、中国の文化と社会にあまねく滲透して、人びとの思考と行動を規定している。

世俗生活のさまざまな欲望や夢の実現をこの「和」の観念に託したのが和合信仰にはかならない。和合とは、和はあらゆるよきものをもたらすと信じる中国人の想像力がつくりあげた神である。したがってその図像には、中国人が理想として思い描く「和」の形が視覚化されるばかりでなく、中国人が「和」というものに期待する効用が如実に表現される。

和合の図像に即してみた場合、世俗生活において和の効用として期待されているものは、「福」「喜」「財」などである。

「福」とは要するにあらゆる幸運である。和合の図像では一般に半開きの円盒からたちのぼる雲気の中に五匹の蝙蝠を飛ばす。「和合生福」（和から幸運が生まれる）の意味である。カササギ（喜鵲）が和合のまわりに飛んでいたり、地上に止まっていたりする図像は和合のひとは喜びごとに出会う（「和合見喜」）といっているのである。具体的には、結婚、誕生、試験合格などが「喜」にあたる（なお、図中のカササギは、「歡喜」という語の強意形である「歡天喜地」という成語を連想させるはたらきもしている）。

だが、和に期待される最大の効用はなんといっても「財」である。これを中国人は「和合生財」（和合は財を生む）ということばで言い表わしている。だからこそ和合は財神のもとに仕えているのである。

この面の効用は、図像中に、銭や銀錠、如意、宝珠、犀角、方勝…といった雑宝を描くことによって表現されるときに一見して明らかである。これらのものは円盒または聚宝盆に盛られていたり、半開きの円盒から立つ雲

気の中に浮遊していたり、あるいは二神の足許に散らばっていたりする。着衣の紋様になっていることもある。雑宝の表現には程度のちがいがあり、ある場合は抑制され、ある場合は強調される。まったく描かれないことも多い。

それでは、雑宝を描かない和合像が財をもたらす神としての資格を主張しえないかというと、そうではない。なぜなら、財をもたらす和合の神力は、まさに持物の円盒によって表象されているからである。

明清の間に大変身をとげたあとも、なお和合が抱えていたものは円盒である。同じく持物と言いながら、蓮とは重みがちがっている。確かに、蓮は民俗図像において大きな地位を占めているけれども、和合にかぎって言えば、副次的な持物にすぎない。

円盒は財を生む力の表象であるばかりではなく、じつは、あらゆるよきものがそこから生まれるのであるが、人びとの得たいとねがうよきものが財富に収斂する傾向のあることと対応して、円盒の産出力はとくに財の面で強調される。

円盒の形状や盒子にまつわる習俗などから、円盒が和合の持物としてその職能・性格とどう関わっているかをみってみる。

和合の神格を説明するときにきまって言われるのが、蓮（荷 hé）と盒（hé）でそれぞれ同音の「和」「合」の文字を表わし、あわせて「和合」の意を寓するという説明である。これが蓮と円盒をもつ清代蘇州系の和合にしかあてはまらず、それ以外の和合の説明にはなっていないことはいうまでもない。

和合の職能との関係からいって重要なのは、持物の名前よりも持物の象徴的なはたらきの方である。如意と円盒の組合わせと蓮と円盒の組合わせがいずれも「和合」の観念を暗示しうるのは、ふたつの碗形を上下に合わせる形の円盒に負っている。この形状が「合体」と「親和」を表現してい

るのである。その点で、円盒は古代の婚礼の重要な儀式であった「合巹」の礼と規を一にしている。ひとつの瓢を二分して作ったさかずき（巹）で新郎新婦がともに酒を飲む。それが婚姻における合体と親和の表象であるのと同じように、円盒も婚姻の理想を形として表現しているのである。

それでは、この婚姻の表象はどのようにして財富を生む容器になるのか。

まずは見なくてはならないのは、それがまた生命を生む女性機能の表象でもあるという点である。円盒はいわば子を生む容器である。婚姻の合体と親和の表象が同時に多産の表象でもあるというのは、十全な婚姻が世代の継承を含まないことはありえないという婚姻観と対応したものである。いわば、婚姻と生殖の形を一物の中に体現しているのが円盒だといえよう。それゆえに、とくに婚礼の場に祀られる神の持物として、円盒は、和合と多産を保証する。そして、財富を生み殖やす力がこの女性機能から派生してくる。

円盒のこのような生殖と貨殖にまたがる意義を考えるには、正月に果物類を盛って年賀の客をもてなす「果盒」というものをとりあげる必要がありそうである。明代の和合が抱える円盒を、『華光天王南遊志伝』では、「宝珠の果盒」と呼んでいたことが思いあわせられる。

正月の年賀の客を果盒でもてなす習慣は、容器の呼び名こそさまざまだが、華中・華南で近時まで行われていた（婁子匡『新年風俗誌』1935年）。ちょうど日本のおせち料理の祝い肴のように、それぞれ縁起を祝う意味をこめた品を盒子にいれておき、これで客をもてなす。地方によっては、主人が客を饗応しながら、品にちなんだめでたいことばを言うところもある。この点からいえば、果盒はさまざまなよきものを蔵するとともに、さまざまな祝福のことばを響かせてもいるわけである。

後世の果盒は、中に果実類のほかに饅頭なども入れるが、本来は果実・種子の類にかざられていた。明代の宮中ではこれを「百事大吉盒」と呼び、

中に柿餅（干柿）、荔枝、円眼（龍眼）、栗、熟棗などを盛った（劉若愚『酌中志』）。植物の果実や種子が多産の表象とされるのは中国にかぎらない普遍的な現象であるが、果盒の習俗もその例で、果盒に入れる品を果実類にかざっているのは、求子祈願や子孫繁栄の予祝としての意味をもつものと考えられる。

ところで、果盒に盛られた果実類が他方で財宝とも同一視されていることが、『華光天王南遊志伝』の「宝珠の果盒」という言い方に暗示されている。「果」と「財」との同一視は「子」と「果」との場合ほどには一般的でないかもしれないが、たとえば、果実のかわりに錢をみのらせた「揺銭樹」（金のなる木）を考え出したのと同じ想像力が果盒の習俗にもはたらいっていると思われる。「宝珠の果盒」という言い方は、果盒が本来「宝珠を蔵する容器」に見立てられていることを意味しているであろう。

円盒の生殖と貨殖にまたがる象徴的な意義を知るうえで、もうひとつ参考になるのは、天津の正月の食習慣である。北京や天津には、「盒子」といって、麦粉を練って円形の皮をつくり、これを二枚合わせて、中に具を包みこんだ食物がある。その形は扁平な円盒に似ている。正月にこの「盒子」を食べる習慣は、家族・夫婦の和や求子、致富の願いと結びついている。永尾龍造『支那民俗誌』（第一巻）によれば、とくに天津では、正月三日に食べる「盒子」を求子と致富によって理由づけている。これについて永尾龍造は、「盒子」は「子宝の容器」を連想させるとともに「金庫の形」と考えられているのだらうと解釈している。「金庫の形」は問題があるにしても、人びとがまるい盒子に、生命を生むはたらきとともに、財富を殖やすはたらきを認めていることは確かである。天津のこの習慣は、明代以降の和合が抱えている円盒の象徴的な機能を側面から明らかにしていると思われる。

最後に、「聚宝盆」にふれておこう。円盒とはすこし形状が違うが、同

じく不思議な増殖作用をもつ容器として想像されているのが「聚宝盆」である。名前のとおり、その増殖作用は、珠宝・財富の増殖に発揮される。

「盆」は蓋のない容器であるから、円盒のように合体と親和を表象することはない。しかし、生み殖やす女性機能をもとに財宝をとめどなく増殖させる力が想定されている点では円盒と同じ意味をもつものである。和合信仰と符節を合わせるように、沈万山の聚宝盆の伝説は、明代後期から清代にかけてさかんであった。この聚宝盆がときとして和合の持物になることは、すでに見たとおりである。